

II-2

特集 糖尿病診療におけるチーム医療はどうあるべきか

II. 多職種協働チーム医療の現状

外来診療におけるチーム医療

赤司朋之

医療法人社団シマダ 嶋田病院 内科部長, 佐賀大学 医学部 臨床教授

糖尿病診療における重要なキーワードのひとつがチーム医療である。チームという概念は、医療機関内でのチームから、地域全体での連携チームまで、幅広い枠で使用される。外来の糖尿病診療では、糖尿病患者の増加に伴い、1人あたりにかけることができる時間が限られているのが現状である。外来診療の質を高めながら、かつ効率的に診療を行うためには、外来の糖尿病診療チームを構成する各職種が高い専門性を持って活動するだけでなく、お互いの職種の役割を理解し合って、協働することが重要である。

本稿では、糖尿病外来チームにおける各職種の役割と、その職種間の連携について、医療法人社団シマダ 嶋田病院(以下 嶋田病院)での取り組みを紹介しながら解説する。また、新しい職種として台頭してきた医師事務作業補助者が、外来糖尿病チームの一員として果たしている役割についても解説する。

はじめに

糖尿病外来では、検査、指導、診察が大きな柱となっている。糖尿病専門医は、自身が行う診察に加えて、検査や指導を適宜組み入れることで、治療効果を高めている。

一方で外来は、通院患者の継続治療だけでなく、診療所や歯科診療所などとの連携、介護施設との情報交換など、さまざまな役割を果たすべき場となっている。このような現状から、糖尿病外来診療はさまざまな職種がチームを組んで、診療効率を上げながら診療の質を担保する取り組みを行うことが重要になっている。

筆者が勤務する嶋田病院では、地区全体でのチーム医療を可能にすることを目的に、平成19年に「糖尿病プロジェクトチーム」を結成した。このプロジェクトにおける糖尿病

外来の機能と、それにかかわる職種は **図1** に示すとおりである。それぞれの機能を維持するために、さまざまな職種が協働して取り組んでいる。

計画性を持った糖尿病診療

糖尿病患者の増加に伴い、多くの病院で患者1人あたりにかけられる外来診療時間が短縮されているのが現状である。しかし、短い診察時間のなかでも、診療の質の担保は最重要課題である。とくに、合併症に関する検査や各種指導を適宜施行することは、診療の質を維持するうえでも重要な項目のひとつと考えられる。

嶋田病院の糖尿病外来診療体制の大きな特徴は、診療計画表に基づいた検査を行っていることである。平成23

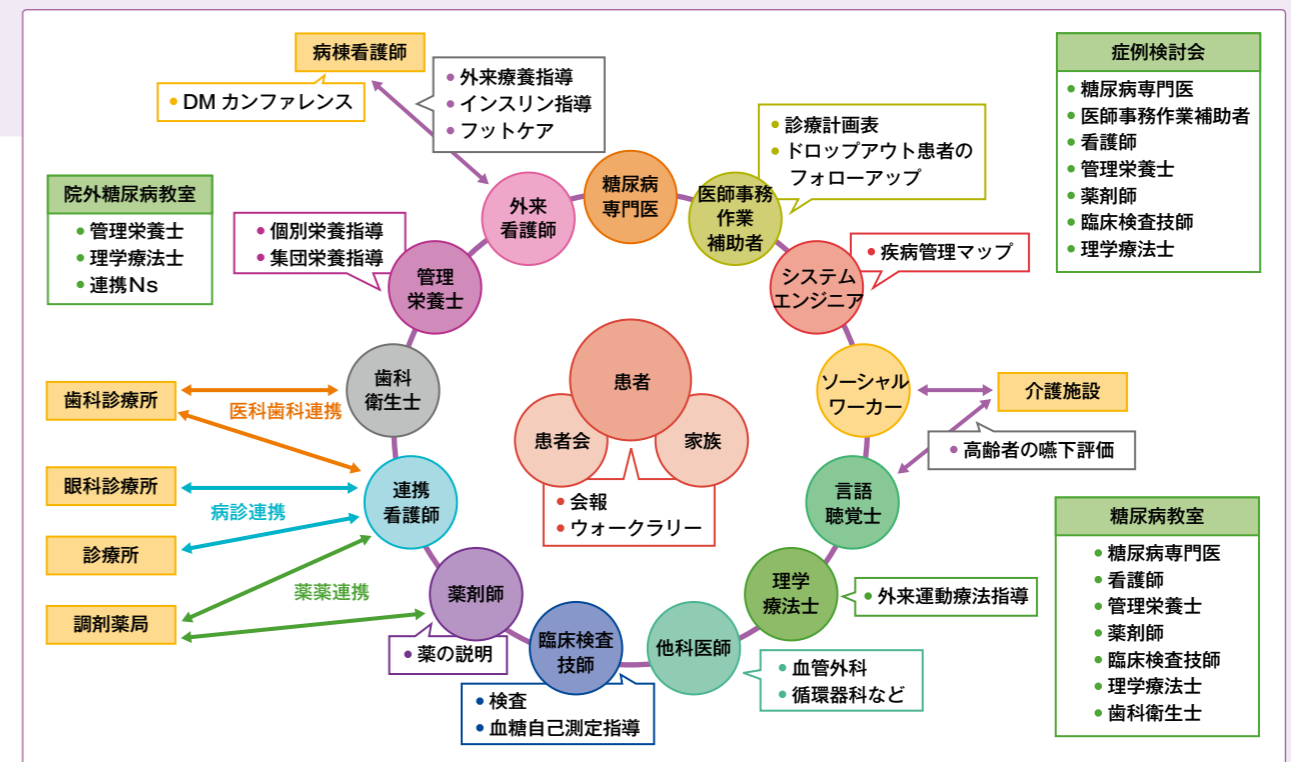


図1 糖尿病プロジェクトチームにおける外来診療体制(嶋田病院)
糖尿病患者を中心に、多職種が協働してさまざまな療養指導を展開している。

年7月までは、医師が検査をオーダーする際には、時系列に並んでいるすべての検査履歴のなかから該当する検査項目を探して、過去の検査日を確認していた。検査をオーダーするときになってはじめて、長期間検査が施行されていないことに気づくことも珍しくなかった。そこで、糖尿病外来担当の医師事務作業補助者が、平成23年3月の時点で2年以内の頸動脈エコーの実施率を調査した。その結果、検査計画に基づき疾病管理を行っている連携バス登録患者の実施率は252人中199名(79%)であったのに対し、当院外来に定期通院している患者の実施率は568名中199名(35%)にすぎなかった。この結果から、外来診療の質を担保するためには、計画的に検査を行えるシステムを作る必要があることが明らかになった。

最初の取り組みとして、平成23年8月から、医師事務作業補助者により、外来予約患者の検査履歴一覧表作成が開始された。心電図、頸動脈エコー、心エコー、脈波伝導速度検査(ABI)などの動脈硬化関連検査や、胃カメラ、大腸カメラ、腹部エコーなどの消化器関連検査、さらに骨密度の最終施行日が書き込まれた一覧表が、毎回

糖尿病外来の開始時に机上に用意されるようになった。

平成24年6月からは、患者自身にも検査予定を把握してもらおう試みを行った。栄養指導と眼科受診の項目も加え、検査計画と指導計画の一覧表を「診療計画表」として糖尿病連携手帳のMEMO欄に貼付する形で患者に配布した(図2)。患者と一緒に1年の計画を立てるため、患者の忙しい時期などを配慮して、患者に負担の少ない立案が可能となった。また、他院で行っている検査も把握することが可能となった。このような試みにより、糖尿病外来患者における2年以内の頸動脈エコー施行率は35%から66%へ上昇した(図3)。

検査履歴表や診療計画表のソフト作成についても、医師事務作業補助者がシステムエンジニアに協力を依頼し、使いやすいソフトがすみやかに準備された。診察時業務の補助を行っている医師事務作業補助者は、医師が患者と決定する予定検査月を手際よくパソコンに入力し、その場でプリントアウトするため、診察中に診療計画表を作成することが可能となった。また、退室時には患者に手渡すことができるようになった。